

学校におけるリズム系ダンスにかかわる検討課題

大橋 奈希左
(教育学科教授)

高田 康史
(広島文化学園大学)

大西 祐司
(びわこ成蹊スポーツ大学)

小島 理永
(神戸女子大学)

抄録

平成 10 年の学習指導要領の改訂において、表現運動・ダンス領域に、リズムダンス・現代的なリズムのダンスが導入された。以後 20 年以上が経っているが、未だに学習内容、指導方法、評価方法等について、議論が絶えないといわれている。本稿では、リズム系ダンスにかかわる検討課題として、まず「リズムにのる」ことに着目して、先行研究をもとに考察を進めた。その結果、「リズムにのって自由に踊ること」の難しさが示唆された。また、「リズムにのる」ことは、「音楽のリズム」と「動きのリズム」の「共調」・「一体化」として捉えられること、リズムにのれていない場合にも、リズムにのれている場合にも段階があることを確認した。リズム系ダンスが導入されて以降、学習指導要領の解釈として、自由な動きや振り付けをよしとする傾向があったが、「音楽のリズム」と「動きのリズム」の「共調」・「一体化」を目指して、学習主体が体験を積み重ねていくためには、従来、既存の「動き」「ステップ」「振り付け」とされてきたものも含め、多様な「動き」の教材が望まれることが明らかになった。

キーワード：リズム系ダンス、リズムにのる、音楽のリズム、動きのリズム、既存の動き

1. はじめに

日本の学校における表現運動・ダンスの授業は、一貫して体育・保健体育科の中で実施されてきた。だが、表現運動・ダンス領域は、現場の教員から、体育・保健体育の中で、最も指導が難しいといわれて久しい（北島 1994、安藤ら 2003、寺山 2005・2007）。また、児童・生徒にとって、「恥づかしさ」の壁があることも繰り返し、指摘されてきた（麻生 1988、古木 2010、大西 2020）。

そのような中で、平成 10 年の学習指導要領の改訂では、リズムダンス・現代的なリズムのダンスが導入され、平成 20 年の学習指導要領の改訂では、中学校第 1・2 学年において武道と並んで必修化され、注目を集めた。

現代的なリズムのダンスに着目してみると、生徒の興味・関心が高いこと、学校現場での採択率が高いことが報告されている（中村ら 2006）。

だが、リズム系ダンス導入から 20 年たっても未だに学習内容、指導方法、評価方法につい

て議論が絶えないと指摘されることもある（中村ら 2020）。何が問題なのだろうか。

2. 学習指導要領解説における現代的なリズムのダンスの技能

必修化された中学校第 1 学年及び第 2 学年のダンスについて、平成 29 年告示の学習指導要領解説をみると、小学校での表現運動の学習を受けて、「イメージを捉えたり深めたりする表現、伝承されてきた踊り、リズムに乗って¹全身で踊ることや、これらの踊りを通じた交流や発表ができるようにすることが求められる」（文部科学省 2017）とある。そして、「技能」の項目の中に、「現代的なリズムのダンスは、ロックやヒップホップなどの現代的なリズムの曲で踊るダンスを示しており、リズムの特徴を捉え、変化のある動きを組み合わせて、リズムに乗って体幹部（重心部）を中心に全身で自由に弾んで踊ることをねらいとしている。（下線引用者）」（文部科学省 2017）と書かれている。「リズムに乗って体幹部（重心部）を中心に全身で自由

に弾んで踊る」という技能を身に付けることがねらいであると捉えられるであろうか。また、「変化のある動きを組み合わせる」とについては、「手拍子、足拍子、スキップ、片足跳び、両足跳び、蹴る、歩く、ねじる、回る、転がる、振る及び曲げる等の動きを素早く動いてみたり、止まったりすることを組み合わせる、続けて踊ることを示している。」（文部科学省 2017）と解説されている。

一方、中学校第3学年の技能の項目、現代的なリズムのダンスをみると、「リズムの特徴を捉え、変化とまとまりを付けて、リズムに乗って体幹部を中心に全身で自由に弾んで踊ることができるようにする。（下線引用者）」（文部科学省 2017）とある。そして、「変化とまとまりを付けて」とについては、「短い動きを繰り返す、対立する動きを組み合わせる、ダイナミックなアクセントを加えるなどの変化や、個と群の動きを共調してまとまりを付けることである」（文部科学省 2017）と解説されている。「変化のある動きを組み合わせる」段階から、「変化とまとまりを付ける段階」へと進んでいくと読み取ることができるが、「現代的なリズムのダンスでは、既存の振り付けなどを模倣することに重点があるのではなく、変化とまとまりを付けて、全身で自由に続けて踊ることを強調することが大切である。」（文部科学省 2017）とも書かれている。ここでいう「既存」とはどのような意味であろうか。先にみた「変化のある動きを組み合わせる」の解説にあった「手拍子、足拍子、スキップ、片足跳び、両足跳び、蹴る、歩く、ねじる、回る、転がる、振る及び曲げる等の動き」も、「既存の動き」であり、生活の中ですでに経験のある動きではないだろうか。「振り付け」ではないとの捉えから、「既存の振り付けなどを模倣すること」よりも「全身で自由に続けて踊ること」が強調されているということであろうか。実践においてはどのような指導・支援がなされているのだろうか。

大西ら(2016)は、リズム系ダンス導入後2014年までの実践研究を分析して、3つの特徴がみられたことを報告している。①既存の動きや振

付を取り上げるもの、②即興的で自由な動きや振り付けを取り上げるもの、③既存の動きや振り付けを工夫したり、創作したりするものである。そして、「これら3つの立場の間には意見の対立がみられる。既存の動きや振り付けを取り上げる立場は、創作ダンスに比べステップや技、型など、覚えることが明確なので教えやすく学びやすいとする一方で、自由な動きや振り付けをよしとする立場は、ステップを習い覚えて踊ったり、そろえて踊る練習に時間をかけたりするのではないという。」と指摘している。

学習指導要領、学習指導要領解説の解釈によって、さまざまに実践がなされていると捉えることができるが、そもそも「リズムにのること」や「自由に踊ること」とはどのようにして実現されるのだろうか。また、「既存の動き」や「振り付け」との関係をどのように捉えればよいであろうか。

本稿では、表現リズム遊び・リズムダンス・現代的なリズムのダンスを「リズム系ダンス」と呼び、「リズムにのること」や「自由に踊ること」についての捉え方を、先行研究をもとに確認した上で、指導・支援する際の「既存の動き」や「振り付け」との関係についても考察を試みる。

3. リズム系ダンスにおける「リズムにのる」ことの重要性

リズム系ダンス導入以降、「リズムにのる」ことについても考察がなされてきている。

神戸(2021)は、30年以上にわたる大学体育の体育実技（全学生必修のいわゆる一般体育）で「ダンス」「リズム系のダンス」を担当してきた指導実践にもとづいて、「乗りのリズム」ということばを用い、「リズムに乗って動くことの重要性」を主張する。その根拠となる実際の指導の中でのその気づきについての記述を引用しておきたい。

教師の考えた身体動作の断片の組み合わせをいくら熱心に指導してみたところで、学生達がそこから更に進んで自らの動きへと発展させることは容易なことではないという現実

に直面したことがその気づきへと至らしめた主因であったと思われる。(神戸 2021)

ここで、神戸は、大学体育における「教師の考えた身体動作の断片の組み合わせ」としているが、小学校や中学校でのリズム系ダンスへの示唆を得るために、先の学習指導要領解説へと立ち戻れば、既存の動きやステップ、振り付けということになるであろうか。また、「自らの動きへの発展」は、「自由に踊ること」ともつながるであろうか。

また、神戸(2021)は、「“乗りのリズム”が重要であるのは、それは“リズム系のダンス”の基礎部分(土台)を形成しているからである。」と述べている。「リズムにのって動くこと」がまず重要であり、大学の十数回の授業で体験できる内容であると考えていることがわかる。特に、「縦乗りのリズム」を乗りのリズムの根幹とし、「身体の弾み」の指導と言い換えていること(神戸 2021)もここで確認しておきたい。「リズムにのる」ということをどこから指導・支援するのかを考察するときに、「身体の弾み」として捉えることは、その入口として、学習者にとってもわかりやすいと考えるからである。

先に見た学習指導要領の「技能」についての記述をみても、神戸による指摘をみても、リズム系ダンスの支援・指導において、「リズムにのって動くこと」が重要であるということは、誰しも認めるところであろう。ただ、大学の90分の授業、十数回でも難しいとされる「リズムにのって自由に踊ること」を小学校・中学校の45～50分の授業、単元5～8時間ですぐに実現できると考えること自体を慎重に見直していく必要があるのではないだろうか。

宮本²(2012)は、「“リズムにのる”ということは、器械運動にみられるような具体的な“技”でもなければ、柔道や剣道などにみられる特定の“型”とは区別されるため、文字で表そうとすると大変困難であることは承知である。けれども、“リズムにのっている”、“リズムにのっていない”という違いは、分かる人には分かるのであり、その根底には核となる動感素材とそれらが

総合された動感構造が存在するのは明らかである。」と述べている。では、技でもなく、型でもない、「リズムにのること」について、どのように捉えることができるだろうか。

4. リズム系ダンスにおける「リズムにのる」ことを問う

原田(2018)は、これまでのリズム系ダンスの捉え方について、「体や動きをリズムで捉える視点に言及していない」、「その動きが音楽のリズムとどのような関係にあるのかについても言及されていない」、「学習内容の資源性と発展についても明瞭とはいいがたい」と批判する。

また、宮本ら(2012)は、「“リズムに乗る”ということが重要であることが示されているにもかかわらず、その“乗り方”についての指導内容は、『体幹部(おへそ)でリズムをとって踊る』という記述におわり、決して十分であるとは思わない。」と指摘する。

原田や宮本らが指摘するように、「リズムにのる」ことが重要であるとされながらも、「リズムにのる」とはそもそもどういうことなのかについての理解も共有されておらず、「のり方」についての指導内容や学びの系統性は示されていない。では、「リズムにのる」について、どのように理解し、どのように指導・支援すれば、「リズムにのって踊ること」が実現できるのだろうか。

先に、神戸の大学での実践をもとに考察したように、「リズムにのって動くことや自らの動きへと発展させること」、「リズムにのって体幹部を中心に全身で自由に弾んで踊ること」は、すぐに誰でもできるような技能なのか否かも慎重に検討する必要がある。「リズムにのること」は小学校・中学校・高等学校の学習プロセスで、体験の積み重ねを通して技能として身につけていくことが望まれるのではないかと考えるからである。

本研究では宮本の先行研究を援用しながら、考察を進めてみたい。

宮本(2011)は、『のっている』と感じさせるものは何であるかを考えてみると、そこには“リズム”の存在が認められる。つまり、我々は

何に対して『のっている』と感じられるのかといえ、それは「『リズムにのっている』ということである。」と述べる。そして、「『リズムにのる』ということがダンス・舞踊の根源的意味を持ち、観ている人に感動を与えることができるということを、経験者のみならず誰もが理解していながら、指導場合^マにおいては、動きの技術指導にとどまり『リズムにのる』ということの指導が疎かになっているように感じられる」（宮本 2011）という。現実の指導実践を振り返ってみると「リズムにのれている」「リズムにのれていない」という判断は直観的になされているとしても、「なぜリズムにのれないのか」については外部視点すなわち教師や学習者同士の判断や評価にとどまり、「リズムにのる」ことを学習者まかせにしている現実があるのではないだろうか。

ここからは、宮本の考察をもとに、学習者側の動感としての捉えを中心に、「わたしがリズムにのる」ことがどのように成立していくのかを問い直していくことにする。

宮本（2011）は、「ダンス・舞踊における“リズム”は、“時間性リズム、空間性リズム、力性リズム”の三つの観点から捉えられている」とし、「ダンス・舞踊における“リズム”を考察しよう」とすると、『音楽のリズム』と『動きのリズム』という二つの異なるリズムの存在を対象としなければならないことが示唆される」と指摘する。そして、「『音楽のリズム』と『動きのリズム』とが互いに共調することによって、新たに生み出された“リズム”こそ、時空間芸術としての特性をもつダンス・舞踊における“リズム”である」（宮本 2011）と考えている。

「リズムにのる」ことについて、学習主体側から考察しようとする試みは、「音楽のリズム」すなわち聴覚によるリズムの捉えと「動きのリズム」、すなわち「わたしが動くリズム」・「わたしが動いているリズム」の共調として、「わたしが動ける感じ」すなわち「わたしがリズムにのれる感じ」について問い直していると考えることができる。

5. リズムにのれていないと感じられる場合の関係³

先に、ダンスにおけるリズムは、「音楽のリズム」と「動きのリズム」の共調によって生み出されることを確認した。宮本は、動感構造として、リズムにのれていないと感じられる場合とリズムにのれていると感じられる場合について検討している。特に、小学校・中学校でのリズム系ダンスの指導を念頭に置く場合、リズムにのれていない場合を3段階に分けていることは注目に値する。続けてみていくことにしたい。

宮本は、リズムにのれていないと感じられる場合の関係について、A 音楽に合わせられない段階、B 音楽との相即が崩れてしまう段階、C 音楽に合わせられる段階があるとした上で、リズムにのれていると感じられる場合の関係を示している。

まず、リズムにのれていないと感じられる段階から、宮本（2011）の考察を確認し、要約していく。

A 音楽に合わせられない段階とは、音楽が鳴っているのにそれに動きを合わせることができないというものである。カウントを数えるような早さの拍つまりはテンポにさえも合わせることができない。「動きのリズム」を生み出すことのみを志向している段階である。

B 音楽との相即が崩れてしまう段階

音楽と動きのあいだにズレが生じてしまう段階である。鳴っている音を音メロディーとして構造化し、音楽としては知覚しているところがAの段階との違いであるが、音楽と動きのどちらか一方に気をとられ、ズレてしまう段階である。

C 音楽に合わせられる段階

音楽に合わせて動くことができ、音楽と動きがずれてしまうことはないが、音楽に遅れることなくしかも動きそのものは洗練化されているとしても音楽のテンポに合わせて踊っているに過ぎない、“振りなぞり”の段階である。

このようにみえてくると、「リズムにのれていないと感じられる」としても、様々な段階があることがわかる。つまり、音楽が流れている中で体を動かしているとしても、音楽のリズムを聴覚的に志向しているか否かといった差異もあり、ときには音楽を志向したり、動きを志向したりすることによって、ズレてしまう段階もあり、また音楽に合っているとしても、単にテンポに合わせられているだけの段階もある。これらどの段階も「リズムにのっている」とは捉えられないことがわかる。

6. リズムにのれていないと感じられる場合の協調関係

では、「リズムにのれていないと感じられる場合の共調関係」はどうか。宮本（2011）の考察を要約すると、動きそのものを意識することはなく、沈み込ませることができ、音メロディーと動感メロディーが一つのメロディー構造として成り立っている段階である。

宮本は、「音楽のリズムと動きのリズムが複雑に絡み合っただけでなく、『リズムにのる』という現象である」と述べる。

そして、「我々が『リズムにのれている』と感じられる場合、運動者自身は、自らの『動きのリズム』だけでなく、『音楽のリズム』も生み出しているような感覚をもっているということであった。」とまとめている。

ここまで確認してきたように、「リズムにのれている」とは、「音楽のリズム」と「動きのリズム」が「複雑に絡み合っただけでなく、『リズムにのる』という現象である」と述べる。そして、「我々が『リズムにのれている』と感じられる場合、運動者自身は、自らの『動きのリズム』だけでなく、『音楽のリズム』も生み出しているような感覚をもっているということであった。」とまとめている。

「音楽のリズム」は、「1. はじめに」で引用したように、「現代的なリズムのダンスは、ロック

クやヒップホップなどの現代的なリズムの曲で踊るダンス」であり、「ロックやヒップホップなどの曲のリズム」ということになる。

七類（1999）は、「ダンスリズムを理解するためにはある程度の音楽知識が必要である」とし、詳細を説明している。⁴ダンスリズムを理解するために知識が必要なのは当然であるが、これまで考察してきたように、「リズムにのって」ダンスを踊るときには、「音楽のリズム」を志向するのであり、聴覚的に音楽の構造を捉えることが必要となり、さらに「リズムにのる」ことの奥の深さがみえてくるのではないだろうか。

7. 「既存の動き」・「振り付け」との関係性をどのように捉えるのか

一方で、「動きのリズム」を志向するためには、学習主体は、どのように動き始めればよいだろうか。

村田ら（2004）は、「表現・創作ダンスとリズムダンスは、「自由なダンス」という点で共通の特性を持つが、両者の違いは、工夫の視点が、前者は「イメージと動きの関係」に、後者は「音楽のリズムと動きとの関係」にある点と考えられる。」と述べる。だが、先にみたように、学習主体にとって、「音楽のリズム」と「動きのリズム」が共調しているような段階で「リズムにのる」「自由に踊る」ことは、すぐにできるとは限らない。表現・創作ダンスにおいて、学習主体がイメージしたことをすぐに動きで表現できるとは限らないのと同様であろう。

特に、表現運動・ダンス領域を苦手とする指導者は、どこから、どのようにはじめることができるだろうか。

先に実践研究の分析について引用した大西ら（2016）は、リズム系ダンスについて運動文化財の教材化、すなわちどのような「動き」を教材とするかという視点から、3つの解釈が考えられるとしている。

- ① ヒップホップやメディアで目にするダンスを予め創作された振り付けと捉え、ダンサーがそれを再現していると解釈する立場。この考えに依拠すれば、リズム系ダ

ンスは音楽に合わせて既存の動きや振り付けを模倣して踊ることが指導内容と考えられる。

- ② ボックスステップやランニングマンといった既存のステップや動きを習得し、それらを組み合わせて踊っている都解釈する立場。この立場に依拠すれば、学習者は一定の動きの習得を先の学習とし、後にそれらにアレンジを加えたり、組み合わせたりして創作する学習へと発展することになる。もしくは、既存の動きをもとに音楽に合わせて動きを自由に選択したり、並べ替えたり、組み合わせたりして即興的に踊ることも可能になる。
- ③ ヒップホップのルーツをアフリカの黒人ダンスにまで遡り、ドラムのビートに合わせた即興的な踊りやヒップホップのバトルという形式による即興的な踊りと解釈する立場。この考えに依拠すれば、学習者がこれまでの生活や学習の中で体得している動きのレパートリーを手がかりに、動きをほとんど指導することなく、音楽にのって自由に踊ることが期待される。

ここで、大西らが示す3つの解釈のうち、3番目に当たるのが、「自由に踊る」といわれるものであろうか。

学習指導要領解説において、「現代的なリズムのダンスでは、既存の振り付けなどを模倣することに重点があるのではなく、変化とまとまりを付けて、全身で自由に続けて踊ることを強調することが大切である。」と書かれていることもみてきたが、「リズムにのる」こと、変化とまとまりを付けて踊ること、全身で自由に踊ることが重要であるとするのであれば、①②に示されていた既存の動きや振り付けを習得することもまた、そこへと至る段階でのひとつの指導のあり方として実践を重ね、そのエビデンスを示していくことが望まれるのではないだろうか。

これまでの「自由なダンス」・「自由に踊る」実践をみるとダンス学習の入口として「体ほぐし」（牛山 2003）特に、手遊びや足じゃんけん

（原田 2011）のような「動き」を導入とすることが推奨されてきた。だが、手遊びやじゃんけんも既存の動きであり、「動き」はじまるからこそ、「リズムにのる」体験へとつながり、その指導法が広まってきたのではないだろうか。大橋（2016）が表現運動・ダンスは、他の科目の芸術教育と比べて物質的基盤が不安定であることを指摘し、動きからはじめる指導・支援の有効性を論じていたように、手遊びやじゃんけんとならべて、リズム系ダンスのルーツとなる運動文化財の中のステップや振り付けを指導の導入の「動き」の教材とすることによって、さらに教材の幅が広がり、いろいろな「動きのリズム」を体験することが可能になるのではないだろうか。

音楽が流れる中で、日常生活の中で体験する動きで遊んだり、既存の「ステップ」や「振り付け」を体験したりすることを通して、「リズムにのること」を習得しようとする学習主体のからだの感じ・動きの感じがそのとき流れている音楽になじみ、「共調」へと至るような指導・支援があってもよいのではないだろうか。

つまり、「動きの習得学習」と「リズムにのる学習」について二者択一的に捉えるのではなく、どちらもの体験を重ねることによって、より豊かに「リズムにのって自由に踊る」ことを実現することができると考えられるのである。

8. まとめにかえて

本稿では、リズム系ダンスについての検討課題として、「リズムにのること」にまず、着目して考察を進めてきた。なぜなら、「リズムにのる」ことが、学習指導要領の技能の項目にねらいであると書かれたり、学習のポイントである（牛山 2003）とされたりしてきたからである。このような用語の問題ともいえる「目標」「指導内容」の曖昧性についても今後解決を目指していかなければならない。

先行研究をもとに「リズムにのる」ことについて考察した結果、「リズムにのって自由に踊ること」についても慎重に検討する必要性が示唆された。また、「リズムにのる」ことは、「音楽のリズム」と「動きのリズム」の「共調」・

「一体化」として捉えられることを確認した。また、リズムにのれていないと感じられる場合にも、のれていると感じられる場合にも段階があることが明らかになった。

リズムにのれていないと感じられる段階からリズムにのれていると感じられる段階へと学習者が体験を積み重ねていくためには、「弾んで」快体験をすることからはじめるとしても、「動きのリズム」のみを志向している段階であるとしても、「動き」の教材は多様であることが望まれることが示唆された。

リズム系ダンスが導入されて以降、学習指導要領の解釈として、自由な動きや振り付けをよしとする傾向があったと感じている。これまで推奨されてきた「体ほぐし」すなわち手遊びやじゃんけんからはじめる指導や日常生活の中の既存の動きを音に合わせて楽しむ活動も体験の積み重ねの中に位置づくとしても、音楽を聞きながら既存のステップを習い覚えて踊ったり、仲間と既存の振り付けをそろえたりずらしたりして踊る練習をすることもまた、「音楽のリズム」と「動きのリズム」の共調・一体化を目指していく段階の中で、必要であると考えるのである。

注

- 1) 平成 29 年告示学習指導要領解説では「乗る」が用いられており、先行研究では、「乗る」「乗り」と漢字を用いているものと、「のる」「のれる」とひらがな表記のものがみられた。引用部分はそのままとし、本稿は、ひらがなに統一した。
- 2) 宮本の考察は平成 20 年度改訂の指導要領に基づいていると考えられる。
- 3) 宮本は、「リズムにのれていないと感じる場合の共調関係」としていたが、リズムにのれていない場合を「共調」とするのかについては、さらに考察が必要だと考え、「共調」を省いた。
- 4) 七類 (1999) は、「ダンスに必要な音楽の基礎知識」について説明している。特に、リズムとメロディ、拍子・ビート・リズムの関係について、知識として学ぶことも必要であろうが、聴覚的に「音楽のリズム」を志向する場合にそれだけ

でも、多様で、奥深いことを今一度確認しておかなければならないだろう。

下記に要約しておく。

音は楽音と非楽音 (7 噪音やスクラッチ音等) に分けられ、楽音には以下 4 つの性質がある。
1.音の高低 (振動数の多少) 2.音の強弱 (振幅の大小) 3.音の長短 (音符の長さ) 4.音色 (振動の波形)

◎音楽の 3 要素 1.リズム (律動) 2.メロディ (旋律) 3.ハーモニー (和声)

◎音符と休符 音の長さと休止の長さ

◎拍子とリズムとビート

拍子 音の強弱の規則正しい繰り返し

拍 (ビート) 拍子を構成する基本要素

リズム 拍子をもとにした音の長短の組み合わせ

◎拍子記号 1 小節に何拍あるのか どの音符を 1 拍とするかを表す記号

◎シンコペーション タイや長い音符を使い、拍子の強弱を一時的に変更して曲調やリズムを変えること

引用文献

- 麻生和江 (1988). 「表現運動・創作ダンスの学習における『恥ずかしさ』について」, 『大分大学教育学部研究紀要』第 10 巻, pp.331-339.
- 安藤幸・岡田晶子 (2003). 「徳島県における小学校舞踊教育の現状と問題点—1991 年と 2001 年の表現運動指導の比較を通して」, 『鳴門教育大学実践教育研究』13 号, pp.53-65.
- 古木竜太 (2010). 「“恥ずかしさ”を払拭する身体表現授業とは」, 『女子体育』第 52 巻第 5 号, pp.36-41.
- 原田奈名子 (2011). 「体幹部を中心に弾む動きでケンパー・グッパーからヒップホップへ」, 全国ダンス・表現運送授業研究会編, 『明日からトライ! ダンスの授業』, 大修館書店, pp.96-97.
- 原田奈名子 (2018). 「『リズムダンス』再考」, 『京都女子大学発達教育学部紀要』第 14 号 (2), p.1-12.
- 神戸周 (2021). 「リズム系のダンスにおける“乗り

- のリズム”に関する一考察」,『東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系』73, pp.251-260.
- 北島見江（1994）.「姫路市小学校教員におけるダンス教育の現状とその意識」,『武庫川女子大学紀要 人文・社会科学編』,第42号, pp.97-102.
- 宮本香織（2011）.「ダンスにおける『リズムにのる』ことについての一考察」,『スポーツ運動学研究』24, p.65-73.
- 宮本香織（2012）.「＜リズムにのる＞動感発生の様相化分析」,『伝承』12, pp.31-42.
- 宮本香織・高岡治（2012）.「『現代的なリズムのダンス』における指導内容についての発生運動学的一考察」,『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第22巻, pp.19-27.
- 文部科学省中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編（令和6年12月一部改訂）https://www.mext.go.jp/content/20250123-mxt_kyoiku01-100002608_2.pdf,
（最終参照日 2025年2月18日）
- 村田芳子・松本昌代（2004）.「生涯学習に向けた『リズムダンス』・『現代的なリズムのダンス』の学習指導に関する縦断的研究」,『日本女子体育連盟学術研究』第21号, pp.21-44.
- 中村恭子・浦井孝夫（2006）.「ダンスの学習内容と楽しさの検討ー創作ダンスと現代的なリズムのダンスの比較ー」,『順天堂大学スポーツ健康科学研究』第10号, pp.65-70.
- 中村恭子他（2020）.「現代的なリズムのダンスの学習内容と学習方法はどうあるべきか？ー主体的で対話的な学びにむけてー」,『体育科教育』第36巻1号, p.72.
- 大橋奈希左（2016）.『学校における創作ダンス教育の原理的考察』, 日本大学博士論文,
- 大西祐司他（2016）.「表現リズム遊び・リズムダンス・現代的なリズムのダンスにおける現状と課題ー学習指導要領に導入されてからの文献を対象にー」,『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』第13号, pp.35-48.
- 大西祐司（2020）.「ダンスの授業における『恥ずかしさ』の要因と実態」,『体育科教育研究』第36巻1号 p.67.
- 七類誠一郎（1999）.『黒人リズム感の秘密』, 郁朋社.
- 寺山由美（2005）.「舞踊教育における学習内容の検討ー特に小学校における『表現』に着目してー」,『日本女子体育連盟学術研究』第22巻, pp.29-38.
- 寺山由美（2007）.「『表現運動』を指導する際の困難さについてー千葉県小学校教員の調査からー」,『千葉大学教育学部研究紀要』第55巻, pp.179-185.
- 牛山真貴子（2003）.「転換期をむかえたダンス学習」,『愛媛大学教育学部保健体育紀要』第4号, pp.127-138.